〔論　文〕

前漢王朝建立時における劉邦集団の戦闘経過について(下)

――劉邦集団内部の政治的派閥の形成を中心に――

陳　　力

拙稿「前漢王朝建立時における劉邦集団の戦闘経過について（中）―劉邦集団内部の政治的派閥の形成を中心に―」[1]において，劉邦軍の関中と魏地での戦闘経過から劉邦集団内部の軍事集団の形成を分析した。劉邦が直轄する軍団以外に呂澤軍団と劉賈軍団が存在していた，呂澤軍団は規模が大きくなるにつれて呂澤と「属」という関係をもつ部下の将校の数が増え，劉賈軍団も「属」の関係を持つ上下関係が現れた。「属」と呼ばれた従属関係は長期に渡って維持された可能性がある。漢二年（前205）八月魏を撃つ時に新たに韓信軍団が形成した，などの考えを述べた。

本稿は前稿の続きとして漢二年（前205）の滎陽周辺の劉邦軍の作戦及び漢三年（前204）から五年（前202）までの劉邦と項羽の戦いの経過を整理し，呂澤・韓信軍団の人的な繋がりについて復元し，劉邦軍内の軍事集団が政治的派閥への移行の端倪を探っていきたい。

Ⅰ　漢二年（前205）前後の滎陽周辺の攻防戦

漢二年（前205），劉邦が彭城を落城した後，項羽は素早く斉の地から楚の地に帰還し，彭城周辺の劉邦軍を急襲した。劉邦軍は大敗を喫して劉邦自身は下邑・碭・虞などを経由してその年の五月に滎陽まで敗退した。敗退の際には劉邦軍各部が混乱していたが，下邑にある呂澤軍団は項羽からの直接的な打撃を受けなかったため，彭城から逃げ出した劉邦は呂澤軍団と合流して西へ撤退したのである。その後，潰散した劉邦軍の諸将校は次第に滎陽周辺に集中した。この時，梁地の王武・魏公申徒が反乱を起こしたので，曹参・灌嬰・靳歙らは王武らの反乱を鎮圧した。そして曹参は南下して昆陽・葉エリアを弾圧し，反乱軍と項羽と連合して宛・武関から関中に浸透する可能性を防いだ。宛葉の間は楚と関中と繋ぐ重要な空間で後述するように劉邦もここで項羽に挑んだことがある。靳歙は北上して趙地の反乱を鎮め，項羽軍が黄河を渡って趙地・蒲関に経て関中への攻撃を防いだ。韓信の部下になった灌嬰が指揮した秦人騎兵の防御作戦により，滎陽の南にある京と索の間で項羽軍の進攻を食い止めたうえに，さらに灌嬰・靳歙ら滎陽の東で項羽軍を打ち破って潼関から関中に入る道路を塞いだ。これで劉邦軍は項羽軍が関中に入るため通らなければならない主要道路をすべて封じた。

漢二年（前205）五月から漢三年（前204）十一月頃（この時の歳首は十月）にかけて，両軍の攻防は秦末以来最大な食糧倉庫の敖倉周辺でも展開され，漢三年十月魏・趙を占領した後，周勃・靳歙・灌嬰らは南下し，敖倉の周辺で戦った。滎陽の南にある劉邦軍と敖倉の間に防壁付きの食糧輸送道路である甬道が築かれ，甬道で滎陽周辺の劉邦軍に兵糧を輸送していたが，漢三年に入ってこの甬道は項羽軍の攻撃を受けた。一方，この前後劉邦軍も項羽軍への兵糧攻めの作戦を開始し，灌嬰・靳歙は両手に分け，襄邑の東方と西方で項羽軍の後方で兵糧の運輸路を襲撃した。これはおそらく漢三年十月邯鄲占領後のことだとおもう。

漢二年（前205）の六月頃，関中地区は不穏になり，劉邦・曹参は一時関中にもどり，章邯が長い間篭城していた廃丘を落城して章邯を殺害

無断転載禁止

阪南論集　人文・自然科学編　Vol. 55 No. 2

表１　漢二年滎陽周辺の戦闘

年	月	事件	人物	場所・経過	出典
漢二年	四月から五月前後まで	漢王屯滎陽，蕭何発関中老弱未傅者悉詣軍。韓信亦收兵与漢王会，兵復大振。与楚戦滎陽南京・索間，破之。築甬道，属河，以取敖倉粟。魏王豹謁帰視親疾。至則絶河津，反為楚。	呂澤	是時呂后兄周呂侯為漢将兵居下邑，漢王間往従之，稍稍收其士卒。至滎陽，諸敗軍皆会。	項羽本紀
			灌嬰	漢王遁而西，嬰従還，軍於雍丘。王武・魏公申徒反，従撃破之。攻下外黄，西收軍於滎陽。	樊酈滕灌列伝
			靳歙	従東撃楚，至彭城。漢軍敗還，保雍丘，去撃反者王武等。略梁地。	傅靳蒯成列伝
				別将撃邢説軍菑南，破之。	傅靳蒯成列伝
			奚意	以魏郎漢王二年従起陽武，撃項籍，属魏王豹，豹反，徙属相国彭越。（?）	高祖功臣侯者年表
			繒賀	以連敖撃項籍。漢王敗走，賀撃楚迫騎，以故不得進。漢王顧謂賀祈王。	高祖功臣侯者年表
			馮無擇	以悼武王郎中，兵初起，従高祖起豊，攻雍丘，撃項籍，力戦，奉衛悼武王出滎陽，功侯。	恵景間侯者年表
			曹参	還至滎陽。	曹相国世家
				（曹）参以中尉囲取雍丘，王武反於（外）黄，往撃，尽破之。柱天侯反於衍氏，又進破取衍氏。撃羽嬰於昆陽，追至葉。還攻武彊，撃諸侯。	曹相国世家
			韓信	漢兵敗散而還，（韓）信復発兵与漢王会滎陽。復撃破楚京・索間，以故楚兵不能西。	淮陰侯列伝
			陳平	（劉邦）引師而還，收散兵至滎陽。以平為亜將，属韓王信，軍広武。	陳丞相世家
			周勃	還守敖倉。	張陳王周伝
			樊噲	項羽敗漢王於彭城，尽復取魯・梁地。噲還至滎陽。	樊酈滕灌列伝
			夏侯嬰	致孝恵・魯元於豊。賜嬰食祈陽。	樊酈滕灌列伝
			丁義	破籍軍滎陽。（詳細は不明）	高祖功臣侯者年表
	六月前後	①王入関，立太子。②漢兵引水灌廃丘，章邯自殺。③関中大飢。	曹参	入屯兵関中。	曹相国世家
			灌嬰	灌嬰雖少，然数力戦，乃拜灌嬰為中大夫，令李必・駱甲為左右校尉，将郎中騎兵撃楚騎於滎陽東，大破之。【この戦闘は八月に行なわれた可能性がある】	樊酈滕灌列伝
			靳歙	破楚軍滎陽東。	傅靳蒯成列伝
	八月		韓信	撃魏。	淮陰侯列伝
	不明		酈商	出鉅野，与鍾離眛戦，疾闘。受梁相国印，益食邑四千戸。以梁相国（?）将従撃項羽二歳三月。	樊酈滕灌列伝
			陳濞	以都尉撃項羽滎陽，絶甬道，殺追士卒。【漢三年夏以後の事件の疑いがある】	高祖功臣侯者年表
			郭蒙	属悼武王，（中略）以都尉堅守敖倉。【漢二年五月から漢三年夏までの可能性が大きい】	高祖功臣侯者年表
			周緤	従東撃項羽滎陽，絶甬道，従出度平陰，遇韓信軍襄國。【漢三年夏の可能性が高い】	樊酈滕灌傅靳周伝
			翟盱	以漢王二年為燕令（南燕国にある県の県令），以都尉下楚九城，堅守燕。【漢二年末前後のことと推測する。灌嬰も参加】	高祖功臣侯者年表

本文の表にある（?）史料に疑いがあるとおもう，【　】は筆者が史料を校正する部分である。

した。劉邦は関中で太子を立て，八月に滎陽に戻った（「秋八月，漢王如滎陽」『漢書』巻一高帝紀。『史記』巻十六秦楚之際月表には「六月王入関，立太子。復如滎陽」と記載）。

この時特に注意すべきとおもうことは韓信の立場の変化であった。漢中時期と関中再進入の時を除いて，漢元年の関中での戦いと彭城占領作戦の関係史料に韓信に関わる内容とほとんどない。京・索の間の作戦は史料に記録された韓信が指揮した最初の戦闘であった。彭城の敗退で韓信の忠誠心が劉邦に確認され，そして京と索の間で得られた勝利でその実績が認められ，

無断転載禁止

劉邦は疑心をもちながら灌嬰が指揮する精鋭の秦人騎兵部隊を韓信に配属させた。言い換えれば，韓信はこの時劉邦から一定の信頼を得てはじめて肩書きだけの大将軍ではなく，指揮権のある司令官とした立場を得たのではないかとおもう。

Ⅱ　漢三年（前204）の戦闘

1．戦闘経過

漢三年（前204）の戦闘は主に北戦場（韓信部隊による魏・代・趙の進攻と占領）と南戦場（敖倉・成皐・滎陽での戦い）で展開された。また，劉賈・盧綰・酈商・靳歙及び彭越は梁地で項羽軍の補給路を破壊するための攪乱作戦が行われた。

北戦場

図1に示すように，北戦場では韓信・張耳軍団の主力は井陘を下り，「背水の陣」の戦闘で趙王及び陳余軍を殲滅した。その後項羽軍の趙地を襲撃する部隊と戦いながら邯鄲周辺を占領した。戦事は順調であった。

南戦場

一方，南戦場の劉邦軍の戦いは相当に苦しく，戦闘が敖倉・滎陽・広武・成皐・巩の周辺で広げられた。端的にいうと，漢三年（前204）十月から十一月前後までは敖倉周辺の激戦，正月から五月前後までは項羽の滎陽包囲戦と劉邦らの滎陽脱出，そして劉邦の関中での兵員調達と宛での箑城戦，六月から八月前後までは項羽の成皐包囲作戦と劉邦の再度脱出と劉邦の黄河北岸での軍勢再集結などの出来事があった。以下はやや詳細に述べたい。

漢三年（前204）十月から十一月まで劉邦軍の状況は極めて緊迫したため，韓信は「兵を発して漢に詣す」（『史記』巻九二淮陰侯列伝），北戦場の曹参・靳歙及び趙の降伏将校の程黒などは南下して敖倉で項羽軍と戦ったとおもう。敖倉・甬道はこの時期の戦闘の中心であったが，正面戦場で勝つことが難しいと感じた劉邦は陳平による反間の謀略作戦の発動を命じた。

四月，項羽軍は滎陽周辺をほとんど占領し，滎陽城を包囲した。この時滎陽に劉邦・韓王と魏王・呂澤・夏侯嬰・陳平・張良・紀信・周苛・樅公・宋昌・孫赤・馮無擇らがいた。

五月，劉邦・呂澤・夏侯嬰・陳平らは滎陽を脱出した。劉邦は成皐経由で関中に戻って謀士轅生の項羽軍を疲労させる作戦の策略を受け入れ，兵員を集めて成皐に出るのではなく，武関から宛（今の南陽周辺）・葉に出た。呂澤は滎陽の脱出の後おそらく成皐まで撤退，後述するようにこの間はおそらく南部戦線の全体作戦の指揮が彼に任されたとおもう。項羽軍は宛で劉邦軍団と対峙する時，成皐・滎陽付近の劉邦軍は貴重な修整の時間を得た。これと同時に彭越は下邳を攻め，項羽軍の補給路を一時切断した。

六月，項羽は宛を離れて彭越を掃討する隙をみて，劉邦は北上して成皐で諸軍と合流した。間もなく項羽は滎陽周辺に戻り，滎陽城を破って西へ進軍して成皐を包囲した。劉邦は成皐を脱出して黄河北岸の韓信軍団に逃げ込んで韓信・張耳から部隊の指揮権を奪い取った。

この時，劉邦軍の黄河南岸の戦線は滎陽から成皐へ，さらに成皐から巩（今河南巩県）へ，余儀なく西側に後退しつつある。韓信はこの年の後半斉の攻撃を準備し，その後趙の地は張耳が守備していた。

八月，韓信・張耳軍から奪い取った部隊を率いて劉邦は小脩武付近に来た。南戦場から脱出した一部の将校も黄河北岸に来て劉邦と合流した。劉邦は項羽軍とここで堡塁戦を展開したが，成皐は項羽軍に占拠された（「諸将稍稍得出成皐，従漢王。楚遂拔成皐，欲西。漢使兵距之巩，令其不得西」（『史記』巻七項羽本紀）。そして劉賈・盧綰部隊が攪乱部隊として梁地に派遣され，彭越軍と呼応して項羽軍の補給路を切断した。

無断転載禁止

阪南論集　人文・自然科学編　Vol. 55 No. 2

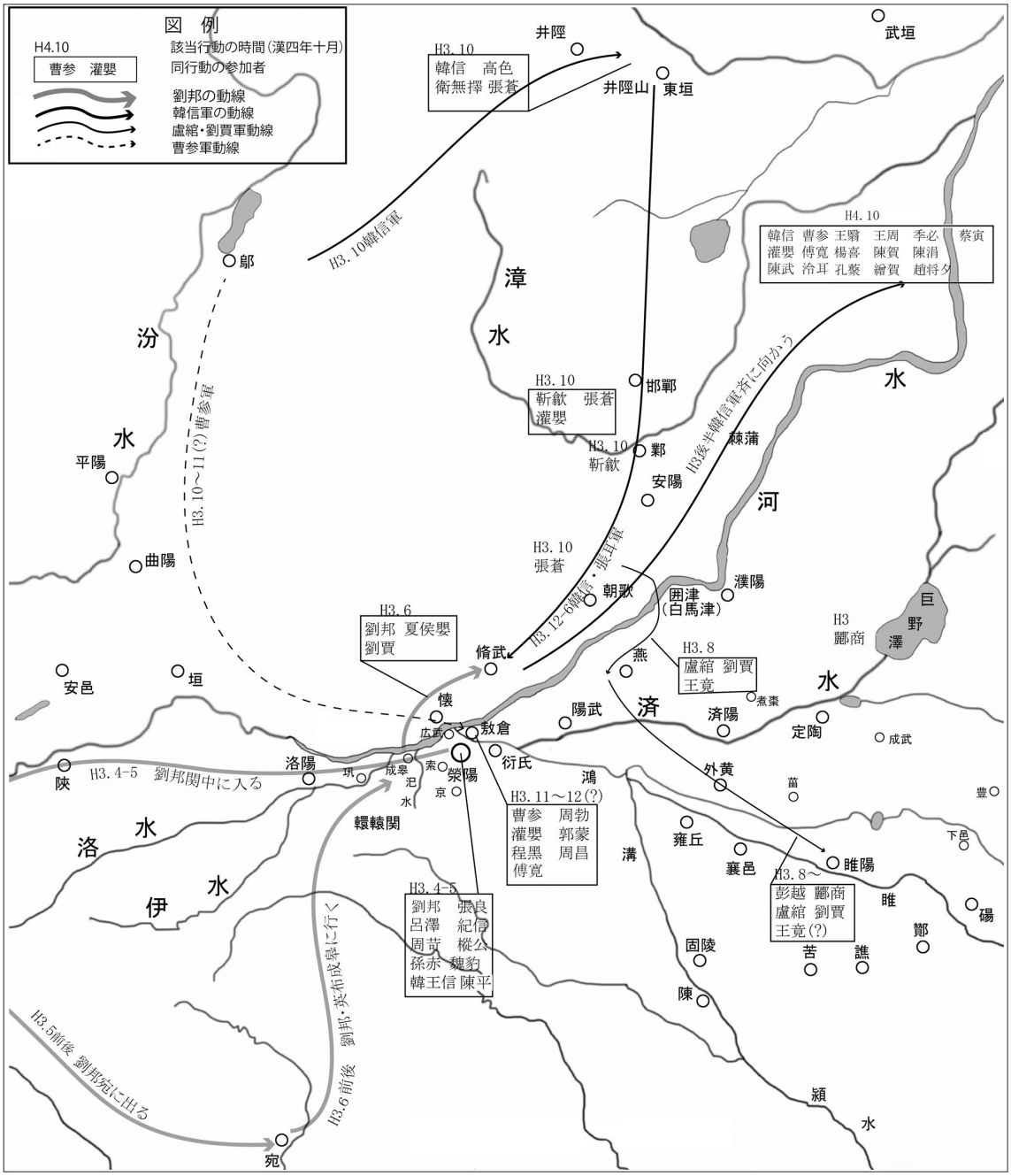

図１　漢の三年の戦い

無断転載禁止

2．将校の動静

この年の劉邦軍の主要幹部の動静を表２のようにまとめた。

表２　漢の三年諸将校の動静

時間		「漢書」紀・「史記」月表	人物	所在	出典
	十月前後から十二月頃	①漢将韓信斬陳余。②漢滅趙王歇（翌月，置常山･代郡）。③漢王分之（黥布）兵，与俱收兵至成皐。項羽数侵奪漢甬道，漢軍乏食。④楚数使奇兵度河撃趙，王耳・信往来救趙，因行定趙城邑，発卒佐漢。	曹参	還囲趙別将戚公於鄗城中。	曹相国世家
				引兵詣敖倉漢王之所。	曹相国世家
			周勃	還守敖倉。	絳侯周勃世家
			韓信	漢王乃令張耳与韓信遂東下井陘撃趙，斬陳余・趙王歇。	高祖本紀
			灌嬰	以騎度河南，送漢王到洛陽，従北迎相国韓信軍於邯鄲。還至敖倉，嬰遷為御史大夫。【郭嵩燾曰，「高祖既未到洛陽，韓信軍亦不在邯鄲」。本伝の記載は漢の二年とする，誤りである】	樊酈滕灌列伝
			周昌	以内史堅守敖倉。	高祖功臣侯者年表
			酈商	以梁相国（?）将従撃項羽二歳三月。	樊酈滕灌列伝
			靳歙	別攻破趙軍，従攻下邯鄲。別下平陽，降鄴。	傅靳蒯成列伝
				従攻朝歌・邯鄲，及別撃破趙軍，降邯鄲郡六県。	
				還軍敖倉，破項籍軍成皐南。	
			召欧	以騎将定燕・趙，得将軍。	高祖功臣侯者年表
			趙将夕（夜）	以趙将漢王三年降，属淮陰侯，定趙・斉・楚。	高祖功臣侯者年表
			高色（邑）	以将軍撃魏，太原・井陘，属淮陰侯。	高惠高后文功臣表
			孔藂（聚）	三以都尉撃項籍，属韓信。【不明が多い】	高惠高后文功臣表
			張蒼	漢乃以張蒼為常山守。従淮陰侯撃趙，蒼得陳余。	張丞相列伝
			陳豨	以游撃将軍別定代。	高祖功臣侯者年表
			衛無擇	以隊卒従高祖起沛，属皇訴【項羽系統の秦末蜂起軍の首領】，以郎撃陳余。	惠景閒侯者年表
			傅寛	所将卒斬騎将一人敖（倉）下。	傅靳蒯成列伝
			程黒	趙衛将軍漢王三年従起盧奴，撃項羽敖倉下。	高祖功臣侯者年表
			郭蒙	以戸衛起薛，属悼武王，（中略）以都尉堅守敖倉，為将軍。破籍軍，功侯。	高祖功臣侯者年表
	正月～五月	①四月，楚囲（漢）王滎陽，漢王請和。②（漢）王出滎陽【「月表」は七月とする】。③漢王自成皐入関収兵。④漢王赴宛。⑤彭越与項声戦下邳。	陳平	（以）黄金四万斤間疎楚群臣。反間既行。（項）羽果疑亜父。	高帝紀上
			酈商	以梁相国（?）将従撃項羽二歳三月。	樊酈滕灌列伝
			紀信	五月，紀信詐為漢王出【滎陽】。	陳勝項籍伝
			周苛	守滎陽。	高祖本紀
			樅公	守滎陽。	高祖本紀
			宋昌	以家吏従高祖起山東，以都尉従守滎陽。	惠景閒侯者年表
			孫赤	坐守滎陽降楚，免，復來。	高祖功臣侯者年表
			馮無擇	奉悼武王出滎陽。	惠景閒侯者年表
	六月		夏侯嬰	与漢王共車出成皐玉門，北渡河，宿小脩武伝舎。晨，奪韓信軍。	高祖本紀
			周聚	撃（項）籍成皐。【詳細は不明】	高祖功臣侯者年表
	七月	①周苛，樅公殺魏豹【「月表」：八月】。②漢王得韓信軍復大振。	周苛	項羽生得周苛。（六月？）	秦楚之際月表
			周緤	従東撃項羽滎陽，絶甬道，従出度平陰，遇韓信軍襄国。【脩武の南西 30 キロ前後の黄河北岸にある】	樊酈滕灌傅靳周伝
	八月	漢王臨河南郷，軍小脩武。	劉賈	渡白馬津入楚地，佐彭越焼楚積聚。復撃破楚軍燕郭西。攻下睢陽・外黄十七城。【『史記』荊燕世家は漢四年とする】	高帝紀
			盧綰	渡白馬津入楚地，佐彭越焼楚積聚。復撃破楚軍燕郭西。攻下睢陽・外黄十七城。	高帝紀
	九月	羽引兵東撃彭越	劉到	以斉将，高祖三年降，定斉。	惠景閒侯者年表
	不明		陳濞	以都尉撃項羽滎陽，絶甬道。	高祖功臣侯者年表
説明			は南戦場。		

阪南論集　人文・自然科学編　Vol. 55 No. 2

3．各軍団における主要将校の相互関係について

上述した漢三年（前204）の戦闘経過の記録をみれば，北戦場の将校の関係を照合できる史料が比較的に多い。漢二年（前205）魏を攻める時，古参幹部の曹参・高邑（色）・衛無擇などはすでに韓信の配下に置かれていたが，高邑は陳余軍を殲滅した後あるいは斉を攻める前，韓信と「属」の関係があるとおもう。衛無擇は陳余軍を殲滅する戦闘に参加したが，韓信に「属」する記録はない。

靳歙は一時期には韓信軍団と邯鄲周辺で戦って協力関係があるが，靳歙部隊は韓信軍団の一部ではないと推測する。趙地が安定してから靳歙は黄河の南岸に渡り，梁・魯などの地で戦った。この前後，酈商は彭越の助役のような立場（後には梁相になった）にあり，梁周辺でゲリラ作戦をしていた。漢元年の隴西・北地の戦闘においても酈商と靳歙の関係が密接であった。

又，魏降伏将校の趙将夕（夜）は漢三年（前204）に韓信と「属」の関係があった。程黒は韓信に降伏した趙の将校であるが，後に敖倉戦場に送られて南部戦場に配属されたとおもう。

この時の北戦場の特筆すべきことは韓信と劉邦集団の古参将校たちとの関係である。例えば曹参と韓信の関係について，まず漢二年（前205），曹参が「以仮左丞相別与韓信東攻魏」（『史記』巻五四曹相国世家）となっているが，趙を占領する戦闘の時，曹参は「因従韓信擊趙相国夏説軍於鄗東」（同上）となった。さらに漢三年（前204）七月前後，「参以右丞相属韓信，攻破斉歴下軍」（同上）になっている。ほかに，傅寛・召欧など北戦場の古参将校も斉を進攻する前に韓信と「属」の関係をもつようになった。それまでの経歴が不明だが，陳武・洽耳も斉を攻める準備をする時に韓信軍に入り，韓信と「属」の関係を結んだ。この詳細は次節で述べたい。

一方，南部戦場の指揮命令系統について，史料の原因で曖昧な部分がかなりある。このため呂澤軍団の将校の間の繋がりは不明なところが多い。

この時期の南戦場においてまず注目したいのは，主に南戦場にいる劉邦が前後数回南戦場を離れたことがある。前述したようにまず漢二年（前205）六月から八月まで関中に戻って廃丘の進攻や太子を立てるなどのことをして長期間南戦場を離れた。又漢三年（前204）五月，劉邦は関中に戻ってその後は関中の兵を連れて宛に行き，そして成皋に戻ったのである。このような行軍及び箑城戦のことを考えるとおそらく一ヶ月前後の時間を要するとおもう。さらに漢三年（前204）六月に劉邦が黄河北岸の脩武に逃げ込んだ。劉邦はいつ黄河南岸の地域に戻ったのかについて，『漢書』巻一上高帝紀に，

> 四年冬十月，（中略）大司馬咎怒，渡兵汜水。士卒半渡，漢擊之，大破項羽軍，尽得楚国金玉貨賂。大司馬咎・長史欣皆自剄汜水上。漢王引兵渡河，復取成皋，軍広武，就敖倉食。

とあり，劉邦は汜水の戦いの勝利を乗じて黄河南岸に帰ったとされている（『史記』巻七項羽本紀の記載に混乱があり，これと違う理解もできる）。

もしこの記載が正しければ，この楚漢戦争の重要決戦である汜水の戦いの際には劉邦が黄河の北岸に滞留していたことになる。つまり，巩周辺の戦闘及び汜水の戦いを直接的に指揮したのは劉邦ではなかったことになる。

この劉邦集団に対して極めて重要な戦闘について，史料に劉邦軍の指揮官に関する記録は不自然といえるほど曖昧である。この時から漢四年（前203）前後まで，南戦場で活躍した将軍級の幹部には，呂澤・王吸・薛欧などと楼煩将の丁復がおり，樊噲・奚涓（漢三年前後戦死）は劉邦の側近で活動しているとおもう。これらの将校の上下関係の歴史から，呂澤はもっとも地位が高くて複数の参戦将校は呂澤と緊密な関係があるから，筆者は汜水の戦いの指揮官が呂澤だとおもう，この詳細について次節で述べる。

無断転載禁止

Ⅲ　漢四年（前203）から五年（前202）の戦闘

１．戦闘の経過

漢四年（前203）の劉邦軍の戦闘は南戦場（成皐付近）と韓信が指揮する北戦場（斉の地）との両面で行われ，撹乱作戦（外黄付近の淮水流域）も積極的に展開された。

北戦場（斉の地）における韓信軍団の戦闘

劉邦軍の北戦場の戦闘は韓信の指揮のもとに行われた。漢三年（前204年）夏，劉邦は斉の地を取得することを決意し，軍事の面では韓信に攻撃の準備をさせ，外交の面では酈食其に斉王を遊説するために斉に行かせた。斉は酈食其の遊説を受け入れて劉邦と連合することを決めた。このために斉軍は黄河西岸の韓信軍団に対する警備を緩めた。韓信軍団は漢四年（前203）十月前後平原付近から黄河を渡って斉の地に入り，歴下の斉軍を急襲した（四年冬十月，韓信用蒯通計，襲破斉。『漢書』巻一上高帝紀上）。斉軍の歴下の指揮官である将軍の華毋傷以下の主要将校が捕虜にされた（「撃破斉軍於歴下，所将卒虜車騎将軍華毋傷及将吏四十六人」『史記』巻九五灌嬰列伝）。そして急行軍をして斉の首都である臨淄を落とした。曹参は斉の北部と西部を掃蕩し（「還定済北郡，攻著・漯陰・平原・鬲・盧」『史記』巻五四曹相国世家），灌嬰・傅寛らは斉の南部を進撃した（「追斉相田横至嬴・博，（中略）。攻下嬴・博」同上灌嬰列伝）。ここで項羽は韓信が斉を占領したこと及び韓信軍の一部は楚を攻撃しようとすることを知り，部下の龍且・周蘭をはじめとする救援軍を斉に差し遣わせ（「項羽聞韓信已挙河北兵破斉・趙，且欲撃楚，則使龍且・周蘭往撃之」『史記』巻八高祖本紀），項羽軍の龍且が斉の高密に辿りつくのは漢四年（前203）十一月前後である。

韓信は斉の各地で掃討作戦をしている曹参・灌嬰らを高密の西に集めさせ，濰水周辺で楚斉連合軍と戦って漢軍が勝利した（「韓信与戦，騎将灌嬰撃，大破項羽軍，殺龍且」同上高祖本紀漢三年及び『史記』巻十六秦楚之際月表）。漢四年（前203）一月韓信は仮斉王と自称し，二月劉邦は張良を斉に遣り，韓信を斉王として冊封した（『史記』巻十六秦楚之際月表）。さらに漢五年（前202）の年初前後，劉邦は楚王を韓信に授かることを約束した。これで韓信は陳付近にいる劉邦軍団と合流し，陳下付近の戦闘に参加した。

項羽軍龍且軍団の最後について，史料の記載に齟齬がある。上引く『史記』巻八高祖本紀や巻七項羽本紀などは龍且が漢四年（前203）十一月の濰水の戦いで殺害されたと記載されているが，『史記』巻十八高祖功臣侯者年表には龍且はその後の灌嬰らによる彭城攻撃の戦闘で丁復に殺害されたと記載されている。

漢四年（前203）十一月頃濰水の戦いが終わった後，韓信は楚地を攻略するために灌嬰を率いた南下部隊を彭城方向に派遣した。灌嬰は魯（現山東曲阜）・薛（現山東鄒県）・下相・広陵（現江蘇揚州）・下邳などの都市を攻撃し，遂に項羽の都の彭城を下した（『史記』巻九五灌嬰列伝。この彭城の落城には不明が多い，例えば，丁復の経歴について，『史記』十六「高祖功臣侯者年表」には「以趙将従起鄴，至霸上，為楼煩将。入漢。定三秦，別降翟王，属悼武王。殺龍且彭城。為大司馬」となっているが，龍且はすでに漢四年（前203）の始めに高密周辺で灌嬰部隊に殺害したとの記録も複数ある）。その後，灌嬰と蔡寅は韓信直轄軍団より一歩先に苦県付近の頤郷で劉邦の部隊と合流し，漢五年（前202）十月にまず固陵付近で鍾離昧を破って劉邦軍を助け（『史記』巻十八高祖功臣侯者年表丁復条など），そして陳下の戦いに参加したのではないかとおもう。また，漢軍の靳歙部は魯の地まで灌嬰部と同じ地域で戦闘した。その後，靳歙部は東進して鄫・郯付近で掃討作戦をした。その後，おそらく下邳で再び灌嬰部と合流し，陳下の戦いに参加した。陳下の戦いの後，靳歙は南郡の占領作戦に参加して江陵王を捕虜にした。この南郡の占領作戦は漢軍の盧綰・劉賈部も加わった。

南戦場――成皐付近の戦闘

話は漢四年（前203）に戻るが，その年の十

阪南論集　人文・自然科学編　Vol. 55 No. 2

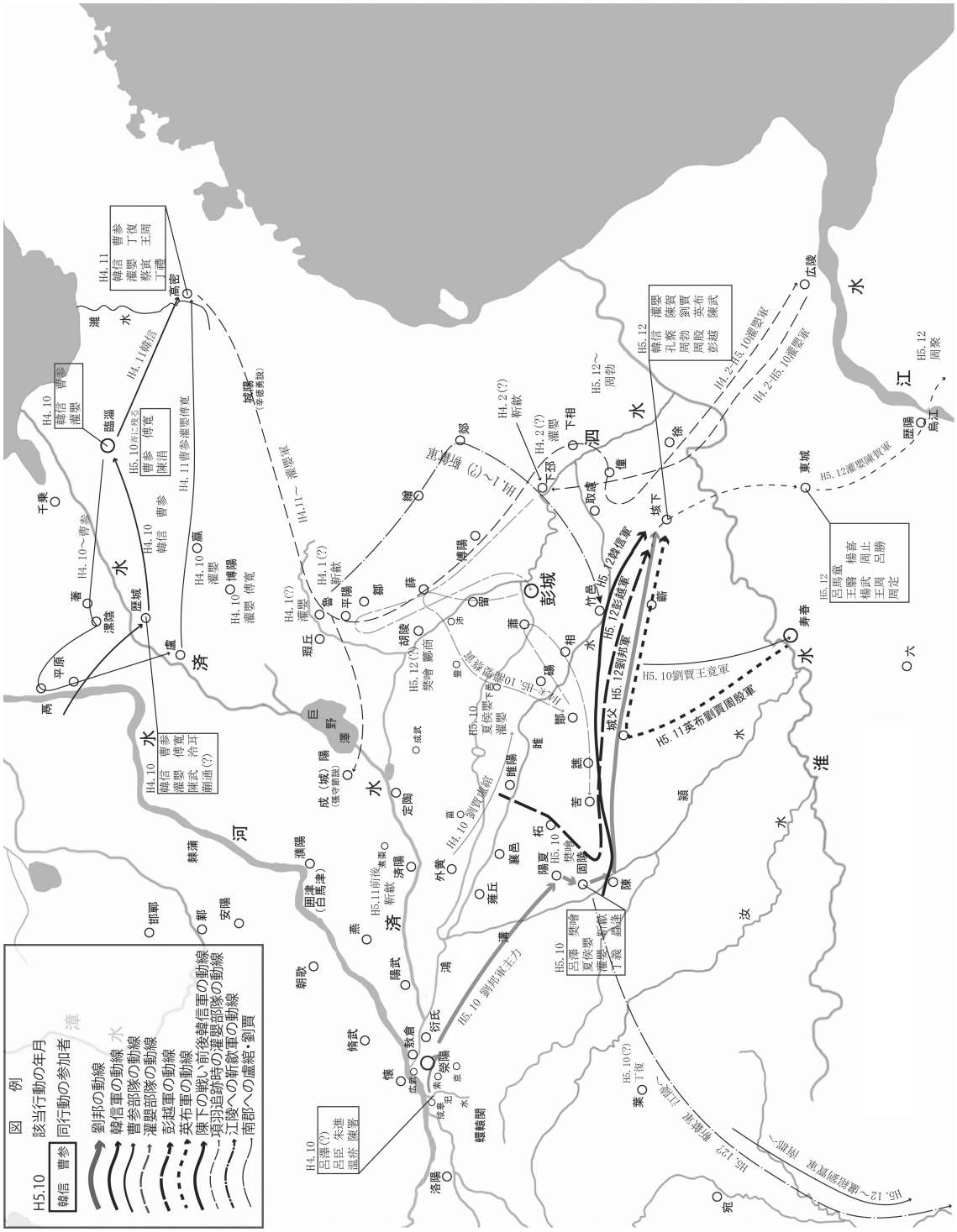

図２　漢四年と漢五年の戦闘

月前後，広武付近においては項羽軍が汜水東岸（成皋一帯）・漢軍が汜水西岸という形で戦線が維持されていた。彭越軍は再び梁の地を占領し，項羽軍の補給路を遮断した。項羽は梁の掃討作戦のために広武を離れ，汜水東岸の項羽軍の指揮は大司馬の曹咎に任せたが，間もなく曹咎は漢軍の挑発に乗って汜水西岸に進撃しようとするとき，劉邦軍に包囲され，曹咎・司馬欣などの重要将校は汜水付近で自殺した。

この汜水の戦いの戦術は韓信の龍且を殺した「濰水の戦い」と類似し，敵の兵士の「半渡」を待って攻撃するという戦術を使った。同じぐらい有名で，敵の心理の把握と戦術の運用が優れた戦闘である。しかしこの戦闘における項羽軍の指揮官と主要将校と参戦部隊について詳しい記録があるが，劉邦軍の指揮官及び参戦部隊についての記録は非常に漠然で曖昧である。『史記』巻十八高祖功臣侯者年表の記録からみれば，漢初の論功行賞の時に「破曹咎成皋」は重要な指標の一つで，これほど重要な戦闘でありながら，なぜその指揮官に関する記録が漠然になっているのかというと，この現象はおそらく呂氏退治の後の史料改刪によって発生したことではないかと推測する。

前述したように，汜水の戦いの勝利を乗じて，劉邦は黄河北岸の部隊を率いて南岸を渡して呂澤軍団と合流して滎陽の東まで進軍し，項羽軍の鐘離昧部を包囲した。この時項羽は再び成皋にもどって劉邦軍を敗退させた。項羽軍は広武で劉邦軍と対峙していた。戦闘中，劉邦は戦傷を受けた。この数ヶ月，両軍は堡塁戦をして戦線はほとんど動かなかった。

一方，項羽軍も兵力と食糧の消耗で漢軍を攻撃する力がなくなったので，漢四年（前203）八月，項羽と劉邦は鴻溝を境にして天下を分ける約束をした。九月，項羽は劉邦の父と妻などを劉邦に帰し，彭城に帰還しようとした（『史記』巻十六秦楚之際月表）。

漢軍の撹乱作戦

漢三年（前204）九月前後，黄河の北側にいる劉邦はすでに盧綰と劉賈を梁地に遣り，楚漢戦争が始まってから巨野沢を根拠地とする彭越とともに梁地の撹乱作戦を展開した。『史記』巻九五酈商列伝に「以梁相国将従撃項羽二歳三月」とあり，項羽が封建した諸王国に梁国はなく，楚漢の際の梁王は漢五年（前202）十月に劉邦が立てた彭越であり，酈商は梁の相国になったのはその後のことと考えられ，この記録に何らかの問題があるとおもうが，酈商は梁の周辺で撹乱作戦に携わった可能性が高いとおもう。さらに靳歙も一連の撹乱のためのゲリラ戦を行っていたとおもう。

藤田勝久氏や佐竹靖彦氏が指摘したように，梁地は項羽軍の食糧供給地であり，梁地にある河川・運河は項羽軍の根拠地の彭城と連絡するための重要な交通路である。この撹乱作戦は劉邦の戦略のなかで重要な位置づけがある。

この撹乱作戦は『史記』巻八高祖本紀に「下梁地十余城」，巻九十彭越列伝に「彭越攻下睢陽，外黄十七城」と記載されている。さらに『史記』巻七項羽本紀に「（項羽）撃陳留・下黄」，「従此以東梁地十数城皆恐」，「東至睢陽，聞之皆争下項王」などの記載があり，彭越及び盧綰と劉賈の撹乱作戦はこの地域で繰り返し行われたと考えられる。

漢五年（前202）の戦闘

この年の戦闘の中で，もっとも有名なのは「垓下の戦い」である。辛徳勇氏は『史記』などに記載されている「垓下の戦い」の戦場は垓下（今安徽省固鎮県垓下村）ではなく，陳下（今河南省周口市鹿邑県）付近で発生したので，「陳下の戦い」と呼ぶべきだと考えている[2)]。また，施丁氏・柴田昇氏は垓下の戦いと陳下の戦いはそれぞれ別の戦役とするほうが理解しやすいと指摘している[3)]。さらに根本的に辛氏の意見に反対する学者もいるが[4)]，筆者はおおよそ施・柴田両氏の意見に賛成するが，ここで補足的な考えを述べたい。

劉邦と項羽の決戦について，『史記』巻六高祖本紀に

（漢）五年，高祖与諸侯兵共撃項羽軍，与項羽決勝垓下。淮陰侯将三十万自当之，孔将軍

居左，費将軍居右，皇帝在後，絳侯・柴将軍在皇帝後。項羽之卒可十万，淮陰先合，不利，却。孔将軍・費将軍縦，楚兵不利，淮陰侯復乗之，大敗垓下。

とある。また，『史記』巻七項羽本紀に，

韓信乃従斉往，劉賈軍従寿春並行，屠城父，至垓下。大司馬周殷叛楚，以舒屠六，挙九江兵，隨劉賈・彭越皆会垓下，詣項王。項王軍壁垓下，兵少食尽，漢軍及諸侯兵囲之数重。

とある。

以上の史料をみれば，『史記』巻六高祖本紀に記録されているこの決戦は完全の野戦対決で，『史記』巻七項羽本紀に記録されている戦闘は劉邦軍の包囲作戦である。つまりこの二つの戦闘は戦闘形態がまったく異なっている。

筆者もおそらく劉邦が項羽軍を殲滅したのは一回だけ野戦の合戦ではなく，陳下付近での軍陣を組む野戦・垓下での包囲戦・東城付近の追撃殲滅戦の三回の戦闘で構成されたと考える。

この三つの戦闘で構成した戦役の経緯はおおよそ次のようである。漢四年（前203）九月，項羽と劉邦の間に天下を中分する約束をし，項羽軍は東へ引き上げることになったが，劉邦は張良・陳平の諫言を受け，約束を破って項羽軍を追撃した。漢五年（前202）十月陽夏付近で項羽軍と戦ったが，韓信と彭越が来なかったため劉邦軍が破られ，固陵付近で堡塁を建てて篭城した（「五年冬，漢王追楚至陽夏南，戦不利，壁固陵，諸侯期不至」『漢書』巻四十張良伝）。

斉王の韓信，楚王になるための南戦場（陳下）の参入

劉邦の固陵での失敗は，韓信・彭越の劉邦を協力するに消極的な姿勢によることである。韓信と彭越がこのような消極的な態度をとった原因について，学者は韓信を含む諸侯が王の封建あるいは王位の保証がないからと考えている[5)]。しかし，この時点では韓信はすでに斉王になっていた。少なくとも韓信のこの時点での非協力的な姿勢，そして最後の劉邦に協力する理由は，戦国から秦末までの楚地の政治文化から探らなければならないとおもう。

『史記』巻四十張良列伝には，漢五年（前202）十月劉邦軍は固陵の戦いで失敗した後，劉邦は張良の計謀を受け入れて韓信と彭越にそれぞれ王位を与えたとの記載がある。この時韓信に授かる王位について，史料に「韓信立為斉王，引兵東詣陳，与漢王共破項羽（『漢書』巻三九曹参伝）とあるが，実際，この時劉邦が韓信に承諾した王位は斉王ではなく，楚王である。

『史記』巻十六秦楚之際月表には漢四年（前203）二月に「立信王斉」との記載があり，『史記』巻六高帝本紀や巻九二淮陰侯列伝も同じく，このことを漢四年の出来事としており，ほかに『漢書』巻四十陳平伝などにも類似の記載がある。このような記載からみれば，韓信が斉王になるのは龍且軍を破った漢四年十一月の後，仮斉王と自称した後，漢四年二月，正式に斉の王に封ぜられた。つまり漢五年（前202）十月に発生した「固陵の戦い」の時，韓信はすでに一年間前後斉王の王位を有していた。又，史料に「（漢五年，漢王）於是乃発使者告韓信・彭越曰，并力撃楚。楚破，自陳以東傅海与斉王，睢陽以北至穀城与彭相国」とあり（『史記』巻七項羽本紀），ここに記録された土地の範囲は明らかに楚の地であり，つまり漢五年（前202）十月頃劉邦が韓信に承諾したのは楚王の王位であった。

秦を滅ぼした後，臨淮出身の項羽は西楚の地を自分の王国にしたことと同じく，すでに斉王になったにも関わらず，淮陰出身の韓信は故郷の楚の王になることを待望していた。このような「富貴不帰故郷，如衣繡夜行」（『史記』巻七項羽本紀）のような考え方はおそらく戦国から秦末までの楚地に存在する一種の政治文化である。これと正反対なのは劉邦の考えである。楚で育てられたが，その来歴が魏であり，そして庶民である劉邦はこのような政治文化を揚棄し，当時経済が発達した秦の地を本拠地とした。これは，劉邦が項羽に勝てた要因の一つではないかとおもう。後述したように韓信は曹参・灌嬰らに対する指揮権を放棄することを条件の一つとして楚王の王位を得ようとした。これは，新しい時代の流れに対して楚の貴族出身

の政治家の思想的な滞りを示しているのではないかとおもう。

又，韓信は陳下に進軍する時にまだ斉の称号をもっていたが，実際に戦勝すれば楚王になるので，斉に残された曹参の立場が変わったとおもう。その後の状況からみれば，この時曹参は斉王韓信の部下というよりも新たな郡県支配へ移行するための斉の最高長官の立場になり，「属」の関係を持つ部下（傅寛）が現れた。同時に灌嬰はこのとき「属」という関係の部下を持つようになった。これを注目すべきだとおもう。

一方，彭越はこの時に劉邦軍に十数万斛の食糧を提供した。灌嬰が統率した騎兵部隊が陳の周辺に到着し，靳歙部隊も陳の周辺に集結した。項羽の根拠地である下邳・彭城周辺の陥落によって項羽軍は補充兵と兵糧が足りなくなり，次第に戦力を失ってきた（「項王軍壁垓下，兵少食尽」『史記』巻七項羽本紀）。大至急に彭城奪還あるいは江東に戻らなければならなかったが，項羽軍はどちらも行かずに陳の周辺で滞っていた。

この時の戦場全体の態勢は次のようである。陳の東方では，灌嬰部隊とその後続部隊は彭城周辺を確実に占領した。陳の南方にある寿春は漢に降伏した。彭越が陳の東北の梁地を制圧している。陳の西にある宛の周辺は劉邦軍に入った王陵の根拠地であり，葉の付近には丁復の騎兵が出没している。項羽軍は完全に包囲されたのである。

項羽は時間をかけて様々な偵察や謀略施行の後，彭城奪還を断念し，呉の地に行くことを決心して東南への行軍を始めた。しかし時はもう遅く，まず韓信軍の主力は陳に来て劉邦軍と合流した。合流が完成した地点は陳の付近だとおもう（前引「曹参伝」に「韓信立為斉王，引兵**東**詣陳，与漢王共破項羽」とある。韓信軍団は東へ行軍したように捉えられる）。合兵した劉邦軍は軍陣を組んで項羽軍に野戦で挑んだ。これはいわゆる「陳下の戦い」であり，項羽軍はこの軍陣戦で破られた。

垓下・東城の戦い

漢五年（前202）十一月劉賈は九江の兵を連れ，英布・周殷と一緒に城父を落城した後，項羽軍に向かった。劉邦軍は絶対的優位に立つようになったので，敗退した項羽軍に対して今度は包囲戦で挑んで項羽軍の八万人を殺害した。これは垓下の戦いである（「項王軍壁垓下，兵少食尽，漢軍及諸侯兵囲之数重」『史記』巻七項羽本紀）。項羽は少数精鋭と共に包囲を破り，長江を渡すために東南へ逃げた。東城付近で韓信・呂澤両軍団の騎兵部隊で混成した連合追撃部隊に殺害された。

項羽軍殲滅作戦はこのように陳下・垓下・東城の三つの戦闘で構成されたが，その詳細についてまだ様々な不明の部分がある。

２．将校の動静

漢四年から五年の項羽殺害までの劉邦軍の主要将校の動静を表３のようにまとめた。

表３　漢四年から漢五年までの将校の動静

時間		『漢書』紀・『史記』月表	人物	所在	出所
漢四年	十月前後	①韓信撃斉。②殺（大）司馬咎汜水上。③漢王引兵渡河，復取成皐，軍広武，就敖倉食。④項羽還，亦軍広武。漢王傷胸。⑤項羽聞韓信破斉，且欲撃楚，使龍且救斉。	曹参	韓信已破趙，為相国，東撃斉。（曹）参以右丞相属韓信。	曹相国世家
			灌嬰	以御史大夫受詔将郎中騎兵東属相国韓信。	樊酈滕灌列伝
				撃破斉軍於歴下，降下臨淄，攻下嬴・博。破斉将軍田吸於千乗。	
			酈商	梁地撹乱作戦。梁相国。（？）	樊酈滕灌列伝
			劉賈	漢四年，漢王之敗成皐，北渡河，得張耳韓信軍，軍脩武，深溝高塁。使劉賈将二万人，騎数百，渡白馬津入楚地，焼其積聚。（『漢書』高帝紀は三年八月とする）	荊燕世家

無断転載禁止

漢四年	十月前後	①韓信撃斉。②殺（大）司馬咎汜水上。③漢王引兵渡河，復取成皐，軍広武，就敖倉食。④項羽還，亦軍広武。漢王傷胸。⑤項羽聞韓信破斉，且欲撃楚，使龍且救斉。	盧綰	使盧綰，劉賈将卒二万人，騎数百，渡白馬津，入楚地，与彭越復撃破楚軍燕郭西。遂復下梁地十余城。【『漢書』高帝紀は三年八月とする】	高祖本紀
			夏侯嬰	広武。（?）	樊酈滕灌列伝
			樊噲	守広武一歳。	樊酈滕灌列伝
			元頃（爰類）	以都尉守広武。	高祖功臣侯者年表
			傅寛	属淮陰，撃破斉歴下軍，撃田解。	傅靳蒯成列伝
			陳（柴）武	撃斉歴下軍田既。	高祖功臣侯者年表
			冷耳	用兵撃破斉田解軍。	高惠高后文功臣表
			王周（虞人）	以都尉破田横・龍且。	高祖功臣侯者年表
			季（李）必	属韓信，破斉。	高祖功臣侯者年表
			呂臣	破曹咎成皐。	高祖功臣侯者年表
			朱通（進）	以中尉破曹咎，用呂相侯。	惠景間侯者年表
			溫疥	以燕将軍漢王四年従破曹咎軍。	高惠高后文功臣表
			陳署	漢王元年起霸上，以謁者撃項籍，斬曹咎。	高祖功臣侯者年表
	十一月	①韓信・灌嬰殺龍且。②（漢王）西入関。復如軍，軍広武。③彭越・田横居梁地，往來苦楚兵，絶其糧食。	灌嬰	東従韓信攻龍且・留公於高密，卒斬龍且。	樊酈滕灌列伝
			丁禮	属灌嬰，殺龍且。	高祖功臣侯者年表
			樊噲	守広武一歳。	樊酈滕灌列伝
			陳濞	以都尉撃項羽滎陽。絶甬道。撃殺追卒。（?）	高祖功臣侯者年表
			丁復	属悼武王，殺龍且彭城（?），為大司馬。破羽軍葉，拜為将軍。	高祖功臣侯者年表
			丁義	以卒従起留，以騎将入漢。定三秦。破籍軍滎陽。	高惠高后文功臣表
			蔡寅	以魏太僕漢王三年初従，以車騎将軍破龍且及彭城。	高惠高后文功臣表
			呂馬童	以司馬撃龍且。（?）	高祖功臣侯者年表
			王周（王虞人）	以騎司馬漢王元年従起廃丘，以都尉破田横・龍且，追籍至東城。	高祖功臣侯者年表
	正月から八月前後	二月，韓信自立為斉王。	灌嬰	別将撃楚将公呆於魯北。殺斉将田吸於千乗。	樊酈滕灌列伝・『史記』田儋列伝
				破薛郡長，攻博陽・下相・僮。取慮・徐。度淮，至広陵。項羽使項声・薛公・郯公復定淮北。嬰度淮撃破項声・郯公下邳，斬薛公，下下邳・寿春。撃破楚騎平陽，遂降彭城。虜柱国項佗，降留・薛・沛・酇・蕭・相。攻苦・譙。【漢四年十一月頃から五年十月前後の出来事，不明が多い】	樊酈滕灌列伝
			樊噲	守広武一歳。	樊酈滕灌列伝
			趙将夕（夜）	以趙将漢王三年降，属淮陰侯，定趙・斉・楚。	高惠高后文功臣表
			（盧）罷師	以斉将漢王四年従淮陰侯起臨淄，撃項籍。	高祖功臣侯者年表
			盧卿	以斉将漢王四年従韓信起無塩，定斉，撃（項）籍。	高祖功臣侯者年表
			季（李）必	属韓信，破斉。	高祖功臣侯者年表
			陳涓	以丞相定斉地。	高祖功臣侯者年表
			劉到	以斉将高祖三年降，定斉。	惠景間侯者年表
			靳歙	破項冠魯下。略地東至阿鄫・郯・下邳，南至蘄・竹邑。【おそらく漢四年十一月頃から漢五年十月前後までのこと，不明が多い】	傅靳蒯成列伝
	九月から翌年十一月前後	①（項）羽解而東帰。漢王欲西帰。張良・陳平諫。②冬十月，漢王追項羽至陽夏南，（中略）楚撃漢軍，大破之。漢王復入壁，深塹而守。	樊噲	項羽引東，従高祖撃項籍，下陽夏，虜楚周将軍卒四千人。	樊酈滕灌列伝
			劉賈	五年，漢王追項籍至固陵。使劉賈南渡淮囲寿春。	荊燕世家
			酈商	攻胡陵。（12月?）	樊酈滕灌列伝
			傅寛	属相国（曹）参，残博陽。	傅靳蒯成列伝
			楊武	撃陽夏。	高惠高后文功臣表
			靳歙	撃項悍済陽下。（?）	傅靳蒯成列伝
			丁義	破鐘離昧軍固陵。	高惠高后文功臣表
			夏侯嬰	撃項籍下邑。	樊酈滕灌列伝

無断転載禁止

漢五年	十二月前後	①擊項籍陳下②至垓下③殺項籍	夏侯嬰	追至陳。	樊酈滕灌列伝
			韓信	淮陰侯将三十万自当之。	高祖本紀
			靳歙	還擊項籍陳下，破之。	傅靳蒯成列伝
			灌嬰	与漢王会頤郷。従擊項籍軍於陳下，破之。	樊酈滕灌列伝
			孔蔡（聚）	孔将軍居住左【属韓信】。	高祖本紀・高祖功臣侯者年表
			陳賀	費将軍居右【属韓信】。	高祖本紀・高祖功臣侯者年表
			周勃	絳侯・柴将軍在皇帝後。	高祖本紀
			陳（柴）武	絳侯・柴将軍在皇帝後。	高祖本紀
			蠱逢（達）	属悼武王。（中略）以都尉破項羽軍陳下。	高祖功臣侯者年表
			灌嬰	項籍敗垓下去也，（灌）嬰以御史大夫受詔将車騎別追項籍至東城。	高祖本紀
			劉賈	劉賈軍従寿春並行【英布と】，屠城父，至垓下。	高祖本紀
			周殷	周殷反楚，遂挙九江兵与漢擊楚，破之垓下。	高祖本紀
			灌嬰	使騎将灌嬰追殺項羽東城。所将卒五人共斬項籍。	高祖功臣侯者年表
			王翳（翳）	以郎中騎漢王二【三】年従起下邳【邯】，属淮陰。従灌嬰共斬項羽。	高祖功臣侯者年表
			王周（虞人）	以都尉破田横・龍且。追籍至東城。	高祖功臣侯者年表
			楊喜	以郎中騎漢王二年従起杜，属淮陰，後従灌嬰共斬項羽。	高祖功臣侯者年表
			楊武	擊陽夏，以都尉斬項羽。	高惠高后文功臣表
			呂馬童	以郎中騎将漢王元年従起好畤。以司馬擊龍且，復共斬項羽【『正義』馬童与項羽先是故人，旧有恩徳於羽】。	高惠高后文功臣表
			呂勝	以騎士漢王二年従出関，以郎将擊斬項羽。	高祖功臣侯者年表
			繒賀	斬項籍。	高祖功臣侯者年表
			周止	以為騎郎将，破項籍東城	高祖功臣侯者年表
			陳賀	用都尉属韓信，擊項羽有功，為将軍，定会稽・浙江・湖陽。【費将軍】	高祖功臣侯者年表
			戴野	以都尉擊（項）籍。籍死，擊臨江，属将軍賈。	高祖功臣侯者年表
			韓信	項羽已破，高祖襲奪斉王軍。	高祖本紀
不明			郭蒙	属悼武王，（中略）以都尉堅守敖倉【漢三年十月前後】，為将軍。破籍軍【不明が多い】。	高祖功臣侯者年表

3．韓信・呂澤両軍団の主要幹部の相互関係

呂澤軍団

劉邦軍の呂澤軍団の将校について，『史記』巻十八高祖功臣侯者年表に僅かの記録しかない。漢四年から五年まで，呂澤に「属」という関係を持っている将校には，郭蒙・郭亭・丁復・蠱達が確認できる。郭蒙・蠱達は秦末にすでに呂澤と「属」の関係があり，郭亭・丁復は漢元年（前206）時に呂澤と「属」の関係を結んだ。

又，馮無擇（後に呂王の相）と朱進（朱通，秦末初起のときは呂澤の郎中）について，史料は明確に呂澤に「属」すると記録していないが，その前後の経歴からみれば呂澤と密接の関係があると考えられる。これらの将校はいずれも秦末から古参将校で呂澤軍団に所属しているとおもう。

呂臣（項梁の部下の呂臣と同姓同名の別人物）は『史記』巻十八高祖功臣侯者年表に「以舎人従陳留，以郎入漢，破曹咎成皐」とあるが，『漢書』巻十六高惠高后文功臣表に「以舎人従起留，以郎入漢，破曹咎成皐」とある。『史詮』・『史記志疑』・『史記斠証』などはいずれも「漢表」に従うべきとしている。つまり，呂臣の初従は呂氏一族の本拠地の単父に近い留の地だと考えられ，呂臣は呂澤と同族関係の可能性があると推測する。楚漢戦争で戦死した呂嬰や後述する呂馬童や呂勝（騰）も呂澤の同族の可能性が高い。

もし呂臣は呂澤の同族であれば，曹咎を殺害した戦闘に参加する将校である朱進（通）・呂臣・陳署・温疥のなかに，朱進と呂臣は呂澤と密接な関係があることになる。つまりこの戦闘について史料に記録が残されている将校が四名

あり，その半分は呂澤と近い関係をもつ可能性が高い。

以上の分析と推測が正しければ，汜水の戦いはおそらく呂澤軍団を主として行われたのではないかとおもい，その指揮官は呂澤の可能性が高いと考えられる。

漢五年（前202）の陳下の戦い及び東城の戦いに参加した呂澤の側近には，蟲逢（達）・呂勝（騰）・呂馬童がいる。

陳署は「以卒従，漢王元年起霸上」と記録され（『史記』巻十八高祖功臣侯者年表），詳細は不明であるが，陳署の経歴について，「以卒従，漢王元年起霸上，以謁者擊籍，斬曹咎」（『史記』十八高祖功臣侯者年表）と記録され，劉邦が漢中に入るとき，劉邦集団に帰属した諸侯の人だとおもわれる（「漢王之国，項王使卒三万人従，楚与諸侯之慕従者数万人」『史記』巻八高祖本紀。この時，秦人は劉邦集団に参加する記録はほとんどない，秦人が漢二年（前205）から劉邦集団に入るようになったとおもう）。温疥について，『漢書』巻十六高惠高后文功臣表に「以燕将軍漢王四年従破曹咎軍」とするので，燕の将軍として漢四年の曹咎軍を殲滅した戦闘に参加した。又，昭涉掉尾は燕の相で項羽軍との戦闘に参加して後に侯を得た（『史記』巻十八高祖功臣候者年表）。柴田昇氏は燕が韓信に降伏したあと，楚漢戦争にかかわる可能性があると指摘しながら楚漢戦争への関与を示唆する史料がないとしているが[6]，温疥や昭涉掉尾の身分からみれば，燕国は楚漢戦争にある程度関わっていたと思われる。

韓信軍団

図２に示すように，斉で戦った韓信軍団は曹参部隊（基本的に斉北部と東部で活動，部下に傅寛がいる）・灌嬰の部隊（陳賀と部下の秦人騎兵将校がいる。基本的に斉の南部と西南・魯，そして楚で活動し，灌嬰は彭城を占領した後，率先に劉邦軍と合流した）・韓信が自ら直指揮する部隊に分けられていた可能性が高い。

斉の攻撃を準備した時，数多くの将校は韓信軍団に入るようになった。曹参・傅寛・陳（柴）賀・孔藂（聚）・衛無擇などの名が挙げられる。斉を攻める前後，灌嬰・孔藂（聚）・陳（柴）武・召欧・周緤・王翳（翕）・王周（虞人）・季（李）必・楊喜・泠耳・陳涓などは韓信に配属された。これにより韓信軍団の高級将校の数はかなり増えた。

前述したように，もともと北戦場で韓信と「別」（魏を攻める時期）・「従」（趙を攻撃するとき）という関係をもつ曹参は斉を進攻する前に韓信との関係が「属」になった。長年曹参と一緒に戦った傅寛もこの時韓信に「属」した（傅寛の経歴を分析すれば，かれは懐つまり脩武付近の作戦・漢二年（前205）の龍且との作戦・敖倉の戦闘では曹参の周辺にいるとおもう，さらに韓信は斉を去った後，傅寛は曹参に「属」したので曹参と密接な関係があると考えられる）。

さらに斉攻撃の前に南戦場から合流してきた灌嬰とその部下の秦出身者王翳（翕）・王周（虞人）・季（李）必・楊喜がいた。また，陳（柴）武・陳賀・泠耳・孔藂（聚）などは前の所属が不明だが，この時期も韓信軍団に入った。

魏の降伏将校の趙将夜（魏将軍，漢三年投降）・蔡寅（魏太僕，漢三年投降）は漢四年（前203）の時点で韓信軍団に入っており，降伏に関わる記載のない趙人の繒賀について，「以執盾漢王三年初起従晋陽，以連敖擊項籍。漢王敗走，賀擊楚迫騎，以故不得進。漢王顧謂賀祈王。戦彭城，斬項籍」と記載されている（『史記』巻十八高祖功臣侯者年表）。この経歴からみれば，おそらく繒賀は漢三年（前204）太原付近で韓信軍に加入したが，降伏に関する記載はない。その後，滎陽戦場に派遣され，漢四年韓信が斉を進攻する時再び韓信の配下になり，彭城などで戦った。彼はおそらく灌嬰の部下で秦人騎兵部隊と共に行動した将校だとおもう。程黒（趙衛将軍，降伏の記載はない）も同じように南戦場に派遣された。斉降伏将校の旅卿・盧罷師・劉到（東茅敬侯の劉到と同姓同名の他人）も漢四年（前203）時点で韓信軍団に入っている。

以上の将校の中，氏名に下線をかけている将校は韓信に「属」する記載はない。斉の降伏将校

の旅卿・盧罷師は韓信との関係が「従」である。つまり，韓信に配属された劉邦集団の古参将校と秦人将校はほとんど韓信と「属」の関係があるが，魏の降伏将校の一部しか韓信に「属」していない，趙と斉の降伏将校はすべて韓信と「属」の関係をもっていないという規則らしい現象が窺える。

韓信に「属」する灌嬰は斉の攻略戦の終了後，南下して彭城を占領した。蔡寅・丁礼・王周（虞人）・季（李）必・繒賀などはこれらの戦闘に参加したので，灌嬰の配下であった可能性がある。丁復について「以趙将従起鄴，至霸上，為楼煩将，入漢。定三秦，別降翟王，属悼武王。殺龍且彭城，為大司馬。破羽軍葉，拜為将軍」と記載されているが（『史記』巻十八高祖功臣侯者年表），前述したように下線部の記載は誤りの可能性があり，前述したように複数の記載には龍且が漢四年十一月高密で韓信軍団の灌嬰部隊に殺害され，龍且は彭城で殺害された記載はこの一カ所だけであり，信憑性は低いとおもう。

陳下・垓下の戦いに参加した将校の所属状況からみた劉邦軍の軍団再編

史料に記録されている陳下と垓下の戦いに参加した将領の所属関係は表４のようである。項羽殺害の状況について史書に，

> 項王身亦被十余創，顧見漢騎司馬呂馬童，曰，若非吾故人乎。馬童面之，指王翳（翳）曰，此項王也。項王乃曰，吾聞漢購我頭千金，邑万戸，吾為若徳。乃自刎而死。王翳（翳）取其頭，余騎相蹂践争項王，相殺者数十人。最其後，郎中騎楊喜・騎司馬呂馬童・郎中呂勝・楊武各得其一体。

とあり，その『正義』に「言呂馬童与項羽先是故人，旧有恩徳於羽」とある。この五人のなかに「呂」という名字の人は二人もいる。これは偶然だと考えにくい。

呂馬童の経歴について前文で度々この文献を引用したが，「以郎中騎将漢王元年従起好畤。以司馬擊龍且，復共斬項」と『史記』巻十八高祖功臣侯者年表に記録されている。前引した項羽殺害の史料によれば，呂馬童は項羽の容貌を知り，さらに前引した『史記正義』に呂馬童は項羽とは，簡単な面識だけではなく，故人であり，以前項羽に恩徳があったと記録されている。このような友情は項羽が関中滞在中でできたものとは到底思えない。なぜなら，『史記』巻十七秦楚之際月表によれば項羽は前206年十二月関中に入って四月前後関中を離れたのである。この間に，「項羽引兵西屠咸陽，殺秦降王子嬰，焼秦宮室，火三月不滅，收其貨宝婦女而東」（『史記』巻七項羽本紀）に記録されたように，もし呂馬童は郎中騎将のような立場の低い秦人であれば，絶対的な支配者である項羽に「恩徳」を与えたことは想像しにくい。この「旧くある恩徳」は対秦作戦乃至その以前のことの可能性が高い。つまり，呂馬童は秦人ではなく，東方の出身者と推測できる。もしこの分析が正しければ，項羽殺害部隊の編成は図３のようである。

表４　陳（垓）下の戦い前後将校の従属関係

場所	氏名	所属	場所	氏名	所属
固陵・陳下	韓信	斉王	東城・烏江	灌嬰	韓信（?）
	周勃	劉邦直轄		周止	不明
	樊噲	劉邦直轄		繒賀	韓信
	灌嬰	韓信，後に劉邦直轄。（?）		呂馬童	呂澤一族（?）
	靳歙	不明		王翳	韓信
	蟲達	呂澤		楊喜	韓信
	柴（陳）武	韓信		王周（虞人）	韓信
	孔熙	韓信		呂勝	呂澤一族（?）
	陳賀	韓信			
	丁義	呂澤			
	楊武	不明			

無断転載禁止

阪南論集　人文・自然科学編　Vol. 55 No. 2

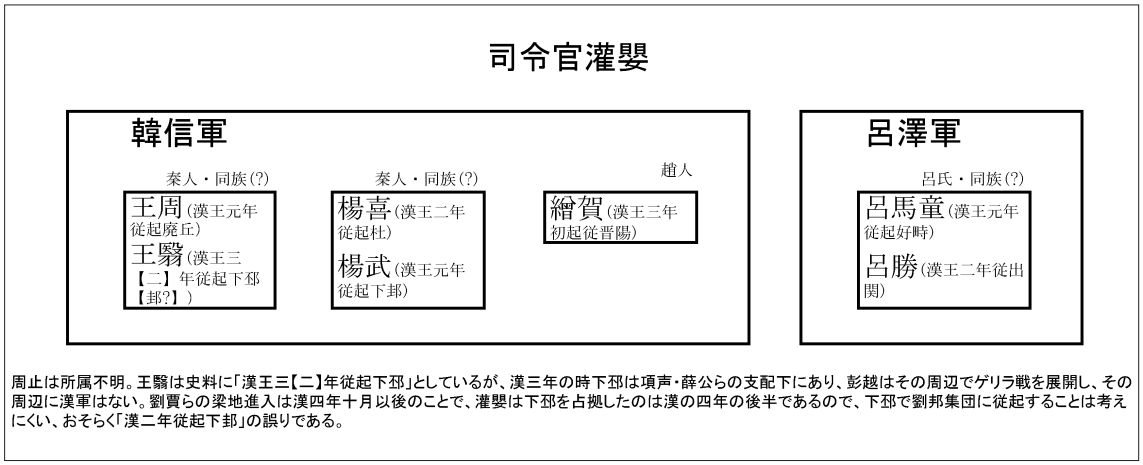

図３　項羽殺害部隊の構成

この図でわかるように，項羽殺害部隊は元韓信軍と呂澤軍の混成部隊である。このような部隊の混成編成は劉邦が韓信の指揮権を剥奪するための布石あるいは結果だとおもう。『史記』巻九二淮陰侯列伝に「項羽已破，高祖襲奪斉王軍。漢五年正月，徙斉王信為楚王」とあり，その『集解』に「以斉為平原・千乗・東萊・斉郡」とある。

おわりに

以上の分析が正しければ，劉邦集団は再び関中を占拠した漢元年の後半から，劉邦集団には劉邦が直接指揮する軍団以外に，呂澤軍団・劉賈軍団の二つの軍事集団が形成した。漢二年（前205）以後，劉邦軍は劉邦直轄軍団と呂澤・韓信・劉賈の三つの軍団に膨らんだ。漢四年の斉地占拠以後，韓信軍団は韓信直轄の部隊・曹参部隊・灌嬰部隊に分けられた。

韓信軍団には，魏と趙で韓信と一緒に行動した豊・沛・碭出身の劉邦集団の古参将校・漢三年（前204）末から四年（前203）まで南戦場から移されてきた劉邦集団の古参将校・各地の降伏将校がある。古参将校はほぼ斉攻撃する時に韓信と「属」との関係になったが，趙と斉の降伏将校などは韓信と「属」の関係を結んでいなかった。

又，韓信と部下の「属」という関係について，前述したように，漢五年（前202）に斉王の韓信は楚王になるために陳下に来たので，韓信と曹参・灌嬰の従属関係に変化が起きて「属」の関係が解消されたのではないかとおもう。そして曹参は斉を郡県へ移行するための留守役をして，灌嬰も韓信軍団より早く，漢四年（前203）の末にすでに固陵周辺で劉邦直轄の諸軍団と合流した。おそらく韓信との「属」の関係が解消された後，曹参・灌嬰は昇格して一方面のトップとして部下と「属」という関係が発生したのではないかとおもう。この二人のこの時の立場や，曹参の郡県設立及び劉邦に協力することと灌嬰は韓信主力より一ヶ月も早く固陵周辺で劉邦軍団と合流するとの行動をみれば，曹参・灌嬰はこの時劉邦の意図と命令を受けて動いているのではないかとみえる。

このように韓信とその高級将校の間で漢四年（前203）頃に「属」の関係が発生し，漢五年（前202）頃，曹参と灌嬰のような古参将校との「属」の関係が解消された可能性が高い。後述の呂澤軍団と比べて，韓信とその部下の高級将校との所属関係は時間的にかなり短く，連帯関係が弱いとおもう。又，前述のように，趙・斉の降伏将校などを自分の「属」にして自分の勢力として取り込むことができなかった。

漢三年（前204）六月と漢五年（前202）正月前後，劉邦は二回も簡単だとみえるように韓信

無断転載禁止

の軍団を奪った。このような韓信軍団の「襲奪」の背景には事前の綿密の布石によることでもあり，このような布石のもとで韓信は劉邦集団の古参将校と降伏将校の間に密接的な関係ができなかったとおもう。

一方，呂澤軍団の状況はかなり違う。史料で確認できる呂澤の部下に豊・沛・碭周辺の出身者がかなり多い。そのなかの一部の将校と呂澤との従属関係はずっと変化がなかった。例えば蟲逢（達）は漢中に入る前にすでに呂澤に「属」し，陳下の戦いまで呂澤の近辺にいたようである。郭蒙は薛で劉邦軍に入って呂澤に所属し，敖倉の戦いで呂澤の周辺で活躍していた。呂澤の部下のなかで呂后時代まで強い繋がりをもつ人も確認できる。例えば，馮無擇は呂澤の郎中として豊で劉邦軍に入り，高后元年博成（城）侯になり，そして高后八年の呂氏一掃の事件でその子の馮代は呂氏一族と一緒に殺害され，まさに二代にわたった生死を共にした関係であった（『史記』巻十九惠景閒侯者年表）。朱進（通）は漢中に入る前に劉邦軍に入りて呂澤の周辺で行動し，呂氏諸王が封ぜられた時は呂王の相であった。又，呂澤の周辺に呂臣・呂嬰・呂勝（騰）・呂馬童などの同族の可能性のある人が多い。この状況からみれば，呂澤の周辺では固い連帯関係の集団が存在していたことが考えられ，上述した馮無擇と朱進の経歴をみれば，この軍事集団が政治的派別に変身したことが確認できる。

呂澤と劉賈が最初に軍団を創ったことには様々な理由があるが，かれらと劉邦との親戚関係は看過できない。軍事天才の韓信に対して，劉邦は終始不信感を抱えていたとおもう。呂澤劉賈軍団はもっとも早い時期に創られたことは劉邦集団の政治を理解するために重要な事項である。

劉賈は劉邦の「親戚」にされていたが，王位を得てから韓信・彭越の場合と同じように劉邦から疏外された。前漢王朝建立後，劉邦は育てたい政治的派別は呂澤と劉邦直轄軍団の幹部たちであったとおもう。『史記』巻十八高祖功臣侯者年表に功労者の順序は次のように記録されている。その楚漢戦争中の「属」関係でグループ化にすると図４のようになる（『楚漢春秋』の順番が違うが，十八の功臣の人選は変わりがない）。

韓信集団は連帯関係が緩やかで一年間余りで解消されたことに対して，呂澤は劉邦との親戚関係やその功績及びその派別の連帯性の強さからみれば，前漢初期においては呂澤をはじめとする政治集団が劉邦にもっとも影響力のあると考える。この集団の動向は新しい王朝の政治的方向の決定にどのよに影響したのか。呂澤集団の詳細及びその漢初における政治的影響力につ

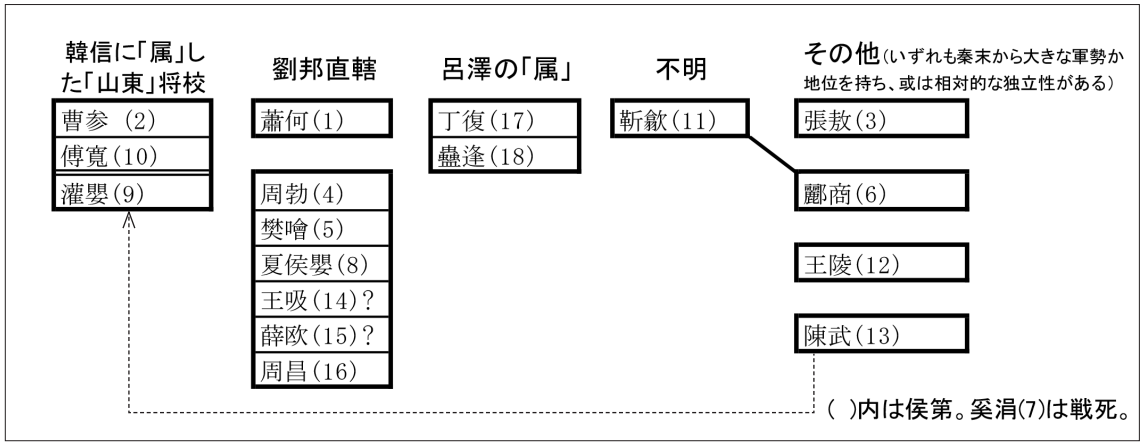

図４　高祖十八功臣の所属関係

無断転載禁止

阪南論集　人文・自然科学編　Vol. 55 No. 2

いては次稿で考察したい。

各表における史料出典の略称

「高祖本紀」:『史記』巻八高祖本紀。
「項羽本紀」:『史記』巻七項羽本紀。
「高祖功臣侯者年表」:『史記』巻十八高祖功臣侯者年表。
「樊酈滕灌列伝」:『史記』巻九五樊酈滕灌列伝。
「傅靳蒯成列伝」:『史記』巻九八傅靳蒯成列伝靳歙。
「惠景閒侯者年表」:『史記』巻十九惠景閒侯者年表。
「曹相国世家」:『史記』巻五四曹相国世家。
「絳侯周勃世家」:『史記』巻五七絳侯周勃世家。
「陳丞相世家」:『史記』巻五六陳丞相世家。
「淮陰侯列伝」:『史記』巻九二淮陰侯列伝。
「高惠高后文功臣表」:『漢書』巻十六高惠高后文功臣表。
「張丞相列伝」:『史記』巻九八張丞相列伝。
「高帝紀上」:『漢書』巻一上高帝紀上。
「陳勝項籍伝」:『漢書』巻三一陳勝項籍伝。
「秦楚之際月表」:『史記』巻十六秦楚之際月表。
「荊燕世家」:『史記』巻五一荊燕世家。
「田儋列伝」:『史記』巻九四田儋列伝。

注

1）拙作「前漢王朝建立時における劉邦集団の戦闘経過について（中）―劉邦集団内部の政治的派閥の形成を中心に―」,『阪南論集（人文自然科学編）』第54巻2号, 2019年3月, P13-26。
2）辛徳勇「論所謂「垓下之戦」応正名為「陳下之戦」」『歴史的空間与空間的歴史――中国歴史地理与地理学史研究』所収, 北京：北京大学出版社。2005年1月。
3）施丁「垓下之戦, 陳下之戦是両事――与陳可畏・辛徳勇商榷」『中国史研究』2003年第1期など。柴田昇『漢帝国成立前史　秦末反乱と楚漢戦争』東京：白帝社。2018年3月, P170。
4）藤田勝久『項羽と劉邦の時代――秦漢帝国興亡史』, 東京：講談社, 2006年9月, P189。
5）楯身智志氏は, 劉邦が項羽に勝てた理由として,「そのために劉邦が採った手段こそ王の封建なのであり, 彼は諸侯を王に封建してその領土を保障・安堵してやることで, 彼らの協力を取りつけていた」と指摘する。楯身智志『漢代二十等爵制の研究』東京：早稲田大学出版社, 2014年2月P151。柴田昇氏も「漢は諸侯との協力なしには西楚と対抗し得ず, 自立性をもった諸侯同士がごく緩やかな結合を成しているに過ぎない反項羽連合軍は, 王位の保障なしには動員困難だった」と指摘する。柴田昇『漢帝国成立前史　秦末反乱と楚漢戦争』, P168, 初出「楚漢戦争の展開過程とその帰結（下）」,『愛知江南短期大学紀要』巻45, 2016年。
6）柴田昇『漢帝国成立前史　秦末反乱と楚漢戦争』, P161。

参考資料

佐竹靖彦『項羽』東京：中央公論新社, 2010年7月。
佐竹靖彦『劉邦』東京：中央公論新社, 2005年5月。
藤田勝久『項羽と劉邦の時代―秦漢帝国興亡史―』東京：講談社, 2006年9月。
堀敏一『漢の劉邦―ものがたり　漢帝国史―』東京：研文出版, 2004年4月。
李開元『漢帝国の成立と劉邦集団―軍功受益階層の研究―』東京：2000年3月。
辛徳勇『歴的空間与空間的歴史―中国歴史地理与歴史地理学史研究』北京：北京師範大学出版社, 2006年11月。
柴田昇『漢帝国成立前史　秦末反乱と楚漢戦争』東京：白帝社。2018年3月。
楯身智志『漢代二十等爵制の研究』東京：早稲田大学出版社, 2014年2月。

（2019年11月22日掲載決定）

無断転載禁止